

年間第三主日

ルカ 1・1-4, 4・14-21

2013.1.27 9:30 ミサ

オリビエ・シェガレ

(パリミッション会司祭)

今、イエスの最初の説教の話、有名な話を聞きました。イエスさまがご自分のふるさとに戻り、シナゴグの礼拝に与っている。そこは、マリアとヨゼフ、お母さんとお父さん、そして親戚の方、また、村の昔の仲間もみんな居ます。みんなイエスさまの評判を聞いているので、イエスさまの話に非常に期待を持って集中しています。シナゴグ、会堂ですね、シナゴグの礼拝の典礼は、ミサのみことばの祭儀に非常に良く似ています。礼拝は、まず、「イスラエルよ、聞け」というシェマーの祈りから始まり、そして、モーセ五書から選ばれた第一の朗読があって、次は、詩編が歌われていて、その後、預言書から選ばれた第二の朗読。で、それについて司式者はコメントを付け加えて説教をします。「この聖書のことばは今日あなたがたが耳にしたとき実現した」と。多分、イエスさまの説教のほとんどは、この導入の言葉から始まっていたのではないかと思います。導入と言っても、宣言です。「今日あなたがたが耳にしたとき実現した」。不思議なほど宣言的なお言葉ですね。それに続いてイエスの説教がありましたけれども、そのイエスの話の内容は記録がないのでわかりませんが、たぶん、イエスさまの説教は直接的なスタイルで、人の心を打つような、響きのあるようなお話ではなかったかと思います。「そうだ。囚われているあなたがたの思いや心はその囚われから解放されます。見えないあなたがたは見えるようになります。圧迫されているあなたがたが自由になります」。そしてイエスがご自分の体験話を交えて、具体的なエピソードに触れていただろう。中風の人が会堂共同体に復帰したとか、目が癒され初めて人間の姿が見えた盲人の感動とか、罪の重荷からゆるされ解放された女とかの話。このような出来事こそ貧しい人々に告げ知らされている福音のしるしです、と。

ここに出る「福音」ということばは、イエスのイザヤ預言書の引用からきています。もともとイエスの言葉ではなくて、旧約聖書のことばです。わたしが思うには、旧約聖書に出る福音のことばは、まず、神さまの創造の行為がすべてよかったという神の祝福を指し、そして救いの業そのものの意味だと思っていますね。この福音というものは、イエスさまの生き方と信仰の中心となっていた。「福音が貧しい人々に告げ知らせる」。これは言葉だけではなくて、出来事である。イエスは、その出来事の体験を通して、福音というものに対しての

確信が深まったのではないかと思います。で、その確信というものは、やはり人々の心を打つ力があって、響きがあったわけです。

このカファルナウムのシナゴグのこうしたイエスの説教は、今わたしたちのミサで行われている司祭の説教の原点だとわたしは思っています。

説教という言葉は、わたしはあまり好きではありません。道徳中心で、人をとがめるような堅苦しい話のイメージで、ふさわしくないでしょう。他の国では「説教」という言葉はほとんど使わなくなってきた、代わりに「ホメリー」という言葉を使います。「ホメリア」というギリシャ語に由来する言葉ですが、親しい会話、家庭的なやりとりですね、優しさのこもったお話です。説教はそれと大分違うようなイメージです。日本語の中には、説法という言葉もあるが、前提には仏法があるので、教会では説教と言います。

説教は、時代と、また、神父様の個性によって、それぞれどうしても特徴があります。昔の、たとえば明治時代の先輩で、この教会を造ったマイエ神父様は、たぶん地獄の話とか、人を脅すような怖い話をしてたかと思えます。最近の神父様の多くはその反対に優しい話するが、聖書の解説で終わる説教が多いような気がします。他の神父様の中には、個人の体験話で説教が終わり、あるいは、雲の上の理想論とか、「べき」論で終わってしまうことがあります。それぞれは特徴がありますが、先ほど言ったように、説教の原点というのは、やっぱりイエスさまのなさった会堂の話ではないかと思います。で、イエスの説教、イエスの話は、非常にバランスが良く、聖書の解説もあれば、体験話もあつたらうし、ときどき厳しい戒めの言葉もあり、ときどき時事の出来事に触れ、お話ししていたかと思えます。いろいろがあつてもイエスさまの説教には、いかにみことばは今日あなたがたが耳にしたとき実現しているかというポイントに尽きたでしょう。こうして日々の出来事をみことばに照らし合わせながら、イエスの説教は希望と意欲を与えている話だったと思えます。

イエスさまの説教のもう一つの大切な特徴は、出来事を振り返るときに、いつも貧しい人々の視点に立って話していたということです。イエスの視点は一貫して貧しい人々、圧迫されている人々で、この視点に立って、いつもお話をなさっていたと思えます。今日、貧しい人々とは誰でしょうか、いろいろありますけれども、解放の神学を始めた有名な神学者グティエレス神父という人は次のように言っています。「今日の貧しい人々は、生きるために必要なものがはく奪されている人々のこと」。どういうものかともっと具体的に言えば、教育の権利、社会保障、人間の尊厳、基本的な権利が奪い取られている人とか、社会評価を否定されている人たち、リストラのために就職できなくなって労働の連帯からはじき出された人々、あるいは高齢のゆえに荷物扱いされているお年寄

りの方、最近話題となっているいじめの対象とされている子どもたち、あるいは窮地に追い込まれて出稼ぎに出ている人々、故郷から疎外されて被災地の仮設住宅の中に入っている人々。イエスはいつもこの人々の視点に立ってものごとを考える。この人たちのことを最優先して、希望と解放、慰めと癒しの福音を告げしらせています。そして、健常者であるわたしたちに、この貧しい人々につながっていくように、ということをおわたしたちに訴えています。

会堂のイエスの説教にたいしての人々の反応は、すぐあとの箇所に出ていますけれども、イエスさまの説教を聞いて、非常に感動して心を癒され、回心の動きを感じた人、そういう人もいれば、イエスさまの話につまずき非難する人もいたようです。だが子どもときからイエスさまと付き合っていてよく知っている故郷の人々は、また、親戚の人々にとって、イエスの話につまずきとなっていた。なんで偉そうにこんなことを言えるのか。また、律法学者も自分たちの権威が脅かされていることを感じて、イエスを殺そうと考え始めました。彼らは、やはり、福音の新しい風に心を向けるということができなくて、心を閉ざして、結局、残念ですけれども非常に否定的な態度をとりました。イエスの説教が人の非難にさらされたら、ましてや今日の神父様の説教も非難の的となることは当然でしょう。正義と平和ばかりに偏っているとか、日本語が通じない、一貫性がない、いろいろあるでしょう。たしかに神父の側にたくさん反省すべき点はあると思いますが、しかし、わたしたちは聖書の朗読のことば、みことばを響かせようとする説教にたいして、本当にそこに福音があると、それを信じて、それに心を開いているのでしょうか。時としてこのことを、神父様だけでなく、みんなと一緒に反省すべきことじゃないかと思います。